

西二葉町遺跡における 明治期以降土地利用変遷史

● 川添 和暁

名古屋市東区西二葉町遺跡は、江戸時代の犬山城主成瀬隼人正中屋敷が所在していたことで知られている。それに加えて、当地は、愛知県立第一中学校などさまざまな学校が機能していた場所としても知られており、本稿は明治期以降の土地利用を図面記録と発掘調査成果を照らし合わせることで整理する試みを行った。その結果、単に埋蔵文化財調査としての土地利用の変遷を辿ることに留まらず、愛知県下の中等教育・高等教育の様子を窺うことができる、重要資料と認識した。校舎建物の構造や配置の変遷などで、教育機関としての重要性を推し量ることができ、学校教育史の解明にあって、新たなアプローチを提示することができるとの予見を得た。

1. はじめに

考古学を学問的基盤とする埋蔵文化財調査は、遺跡・遺構・遺物を研究対象とするものであり、時期・時代は特定されるものではない。この研究手法の特性から、考古学の研究領域の時代・地域が広がり続けていることは、現在、多様な研究分野（専門分野）が言われている事情からも理解できるところであろう。

本稿で取りあげる西二葉町遺跡は、現在の愛知県立明和高等学校の敷地内を含む範囲にある。当地では繰り返しの土地利用に加えて、近世以降、地図・図面などの記録が詳細に残されていることが特筆される。当地の土地利用変遷を辿ると、愛知県下における中等教育および高等教育の黎明期からを追うことができ、単に当地利用史を考えることに加えて、県下の近現代教育史的にも学術的意義がとて大きい効果が期待されるところである。

2. 西二葉町遺跡について

西二葉町遺跡は、名古屋市東区白壁に位置する遺跡で、その範囲は、県立明和高等学校敷地から北東に鎮座する七尾天神社方面に広がる。当地は特別史跡名古屋城跡および名古屋城三の丸遺跡の東に位置しており、現地表の標高は15.5m、名古屋台地が北側に向かって傾斜する

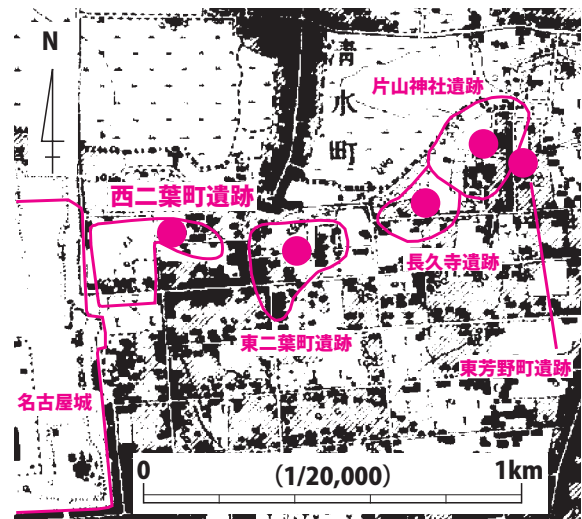


図1 西二葉町遺跡の位置（明治24年旧陸軍地形測量部地形図「名古屋」より）

崖ぎわ付近に立地している（図1）。段丘縁辺東側に向かって、東二葉町遺跡や長久寺遺跡、片山神社遺跡などが知られており、後期旧石器時代や縄文時代の遺構・遺物など先史時代からのヒトの活動痕跡が認められる場所となっている。西二葉町遺跡に関しては、当初、遺跡範囲は台地北縁区域のみであったが、これは吉田富夫によって「古墳時代聚落址」とした二葉町遺跡が該当するようである（伊藤1999）。これとは別に、明和高等学校敷地全体には成瀬隼人正中屋敷が所在していたことが以前から知られていた。そのため、2023年に愛知県埋蔵文化財調査センターによる試掘調査が実施され、その結果、遺跡は明和高等学校敷地内一帯に広がっ

ていることが判明した。

なお、近世の犬山城主成瀬隼人正中屋敷の絵図面に関する詳細な検討は、公益財団法人 犬山城白帝文庫「研究紀要」19 で公表予定である。合わせて参照願いたい。

3. 文字・地図記録の検討

明治期以降の当地の土地利用変遷の記録は、愛知県立第一中学校（現在の旭丘高等学校）創立百年祭実行委員会による『鯉光百年史』（真野ほか 1977）のほか、『愛知県第一高等女学校史』（森川・山本ほか 1988）、『愛知県立明和高等学校史』（鬼頭ほか 1998）など、各学校史などから詳細に辿ることができる。まずはこれら先学の業績をもとに、地図記録などをもとにした土地利用の変遷についてまとめておく。主な出来事については、表 1 にまとめた。

明治 8（1875）年からは、現在の県農業試験場のもととなった栽培所・農事試験場として使用されていた。土地用地として広大な面積が使用されたと言われているが、主として使用されたのは、現在の学校敷地北西側からの段丘斜面地のようなものである（伊藤 1999）。当地が、学校用地となったのは明治 30 年代末からで、それまでであった陸軍の仮病院の棟を解体して校舎が建てられたという。

当地に愛知一中の学校校舎全体が完成したのは明治 43（1910）年とされ、当時の校舎配置図を、愛知県立第一中学校学友会刊行の機関誌『学林』で見ることができる（愛知県立第一中学校校友会 1910、図 3 左上）。敷地東半分には本館と教室が配されるというのが基本的な配置であった。この時、正門は本館の南、すなわち敷地の南東側に設けられたのであるが、江戸時代以降の当地の土地利用の歴史の中で、南東側に正門を設けたのは、この愛知一中の校舎配置のみであった。西半分は北側が運動場、南側には校内の寄宿舍（舎生室）が設けられ、修文寮と名付けられたという（真野ほか 1977）。ほどなくして舎生室の場所は、大正時代末には陸上トラックやテニスコートなどに整備されたようであるが、東側の建物群はそのままの形状であった（図 3 右上）。

建物の様子は、当時の写真で現在も窺うことができる。当時の建物は、コンクリートにレンガを積んだ基礎で、その上に木造平屋の建物が造られた構造で、本館のみが 2 階建てとなっていた。各教室の他、大型の建物としては、生徒和室、講堂、講武場があり、本館とともに学校の象徴的な建物となっていたようである（図 2）。

愛知一中は昭和 13（1938）年 7 月に新出来町に移転することとなり、そのまま現在の愛知県立旭丘高等学校に至ることとなった。一方、その後の西二葉町の当地は、名古屋帝国大学の設立に大きな役割を果たすこととなったのである。名古屋帝国大学は、昭和 14（1939）年 3 月 31 日の勅令第 120 号で官制公布となり、同 4 月 1 日の大学設置となった（名古屋帝国大学 1940）。当初は本部が愛知県庁内に設けられたようであるが（東区史編纂委員会 1973）、9 月には西二葉町に本部が設置され、昭和 15（1940）年 4 月には当地に理工学部が開設となった。総合大学としての名古屋帝国大学が開設された訳であるが、特に本部は仮設としてこれまでの愛知一中の校舎がそのまま利用された。仮設とされた理由は、名古屋帝国大学は計画当初から現在の千種区不老町周辺での東山地区でのキャンパス構想がすでにあつたことによるためであった（勝山 1991、木方 2004）。実際、昭和 19（1944）年 12 月には、本部と理学部は東山地区への転出がなされ、その後当地には工学部のみが残ることとなった。大学開校当初は愛知一中時代の校舎に加えて、敷地北西側から校舎の増設が行われていった。昭和 17（1942）年になると敷地全面に校舎が建て増しされた様子を見ることができ、当時の戦時下において短い期間に大学としての整備が急ピッチで進められたことが分かる（図 3 下左右）。愛知一中以来続いた学校校舎は、昭和 20（1945）年 5 月の名古屋大空襲で、ほぼすべて（一説には 4 分の 3 程度）が焼失してしまうこととなった。

終戦後、名古屋帝国大学工学部は、現在の熱田区高蔵周辺に疎開したようである。西二葉町の当地には、愛知県第一高等女学校校舎が建設されることとなった。戦後、物資の限られたなか建てられたのであったが、当初南西区画に木

表1 明治時代以降の西二葉町遺跡（明和高等学校敷地内）土地利用変遷表

和暦年	西暦年	月	事柄	備考
明治初年			成瀬家が西二葉町用地を明治政府に返還 大野広景 所有	
明治 8 年	1875	11	愛知県栽培所・薬草園 転入	明治 11 年 植物園と改称
明治 26 年	1893		栽培所を母体として農事試験場を創設	
明治 29 年	1896		農事試験場 現在の清須市寺野に転出	
			日清戦争での陸軍の仮病院	体育会所属
明治 40 年	1907	8	愛知一中校舎 西二葉町に 2 棟 竣工	9 月から授業開始
明治 43 年	1910	1	愛知一中校舎建設 完成	
～大正 10 年			南東区角に陸上トラック・テニスコートなど整備	
昭和 13 年	1938	7	愛知一中 新出来校舎に転出	
昭和 14 年	1939	9	名古屋帝国大学本部 転入	本部設立は 14 年 4 月 愛知県庁内
昭和 15 年	1940	4	名古屋帝国大学理工学部 開設	
昭和 19 年	1944	12	名古屋帝国大学工学部のみ残る	本部と理学部は東山校地へ転出
昭和 20 年	1945	5	名古屋大空襲により焼失 北東区画内に住宅地建設	
昭和 22 年	1947	6	愛知県第一高等女学校 西二葉町に 2 棟【木造】竣工	
昭和 23 年	1948	3	第三棟校舎【木造】竣工	
昭和 23 年	1948	4	愛知県立第一女子高等学校 発足	
昭和 23 年	1948	6	愛知県立第一女子高等学校 和楽会館 竣工	
昭和 23 年	1948	10	明倫高等学校との合併により愛知県立明和高等学校 発足	
昭和 24 年	1949	4	全日制普通科・商業科・家庭科、定時制 普通科	
昭和 25 年	1950	4	全日制音楽科新設	
昭和 28 年	1953	5	本館【鉄筋コンクリート 3 階建て】竣工	
昭和 33 年	1958	12 ～	木造校舎第一・二・三棟について、西側渡り廊下 端までの一部分取り壊し	名古屋市都市計画の学校用地外西側道路の拡幅による
昭和 34・36・37 年			鉄筋コンクリート新校舎の竣工	
昭和 38 年	1963	2	講堂兼体育館「明和館」竣工	
昭和 38 年	1963	4	新設の愛知県立千種高等学校が木造校舎に間借り同居	昭和 39 年 1 月 20 日まで その後木造校舎の解体
昭和 39 年	1964	6	弓道場 竣工	
昭和 41 年	1966		クラブハウス（7 月）、バレー・テニスの野外コート完成	一時期住宅地となった北東区角 整備
昭和 43 年	1968	7	プールおよび武道場「明光館」竣工	
昭和 46 年	1971	6	新本館校舎 竣工	
昭和 59 年	1984	3	西館音楽棟 竣工	
昭和 60 年	1985	3	前庭整備工事完成	
令和 6 年	2024	4	附属中学校校舎・音楽棟など校舎建て替え工事開始	
令和 7 年	2025	4	附属中学校開校	

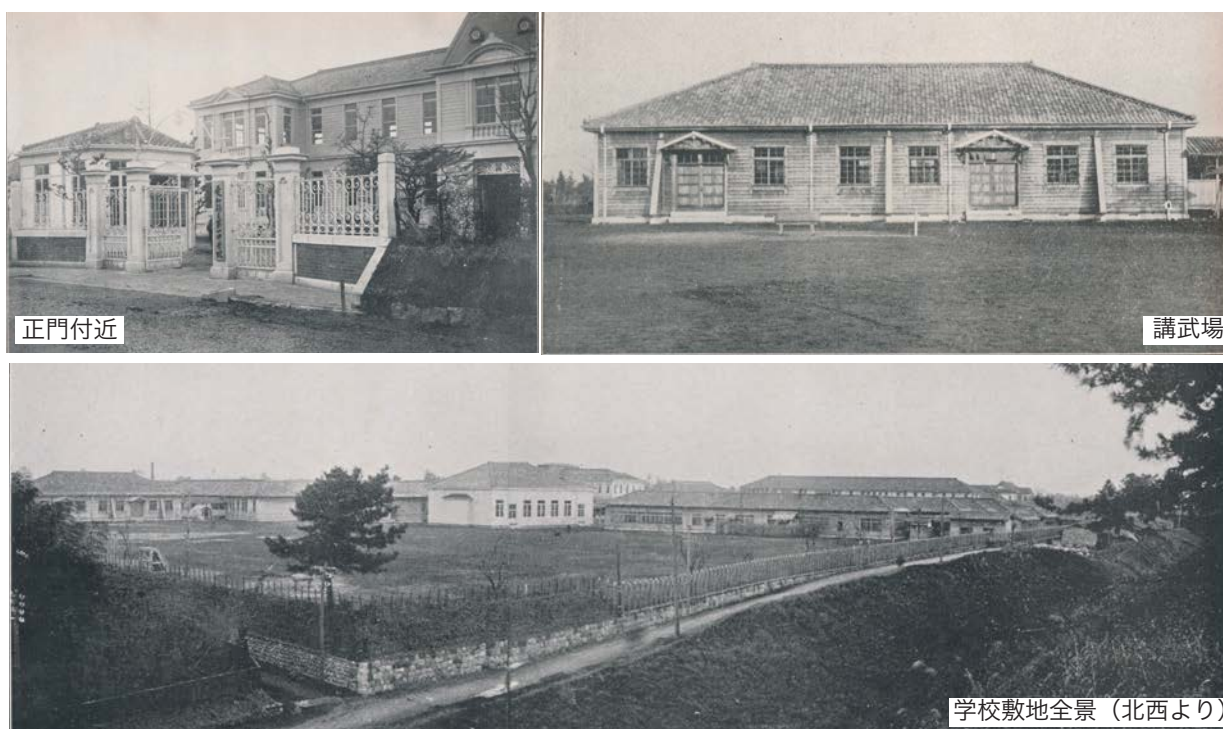
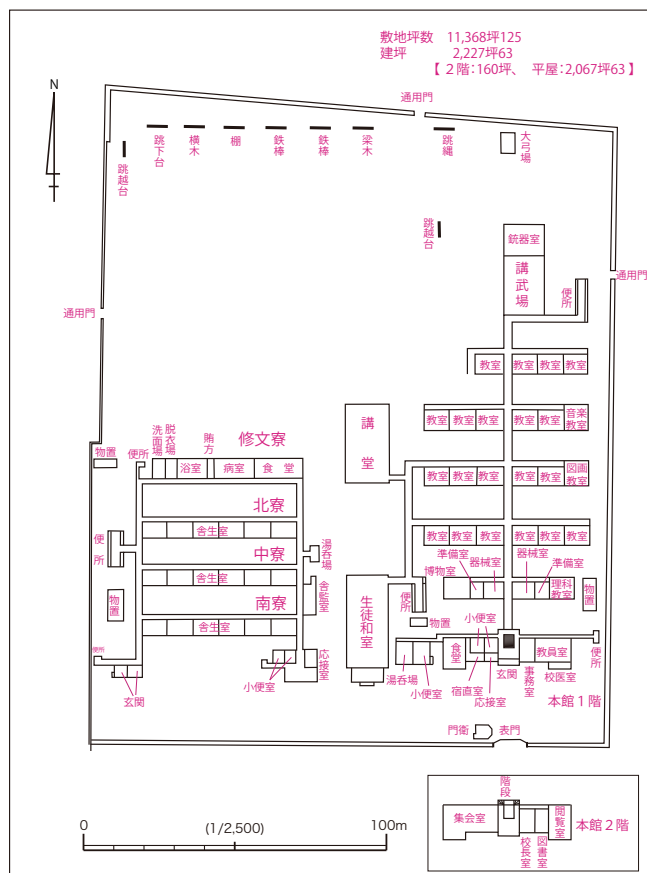
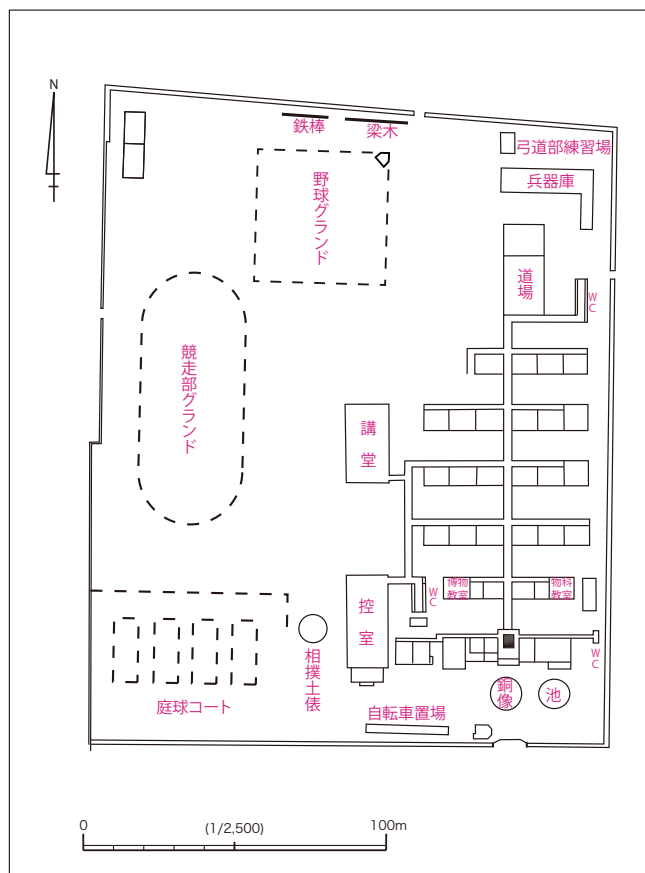


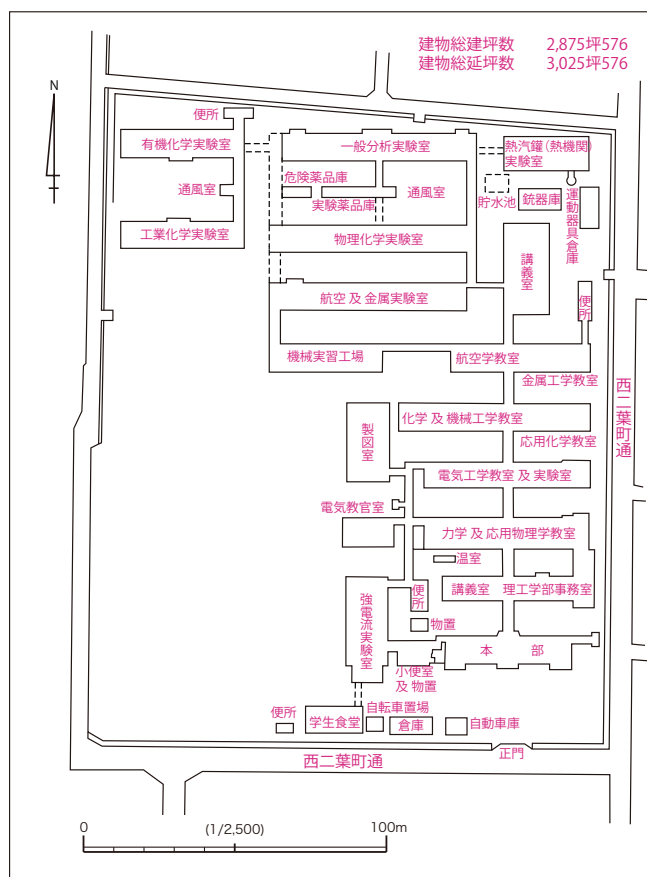
図2 愛知県立第一中学校 西二葉町校舎落成時の状況（愛知県立第一中学校学友会 1910 より）



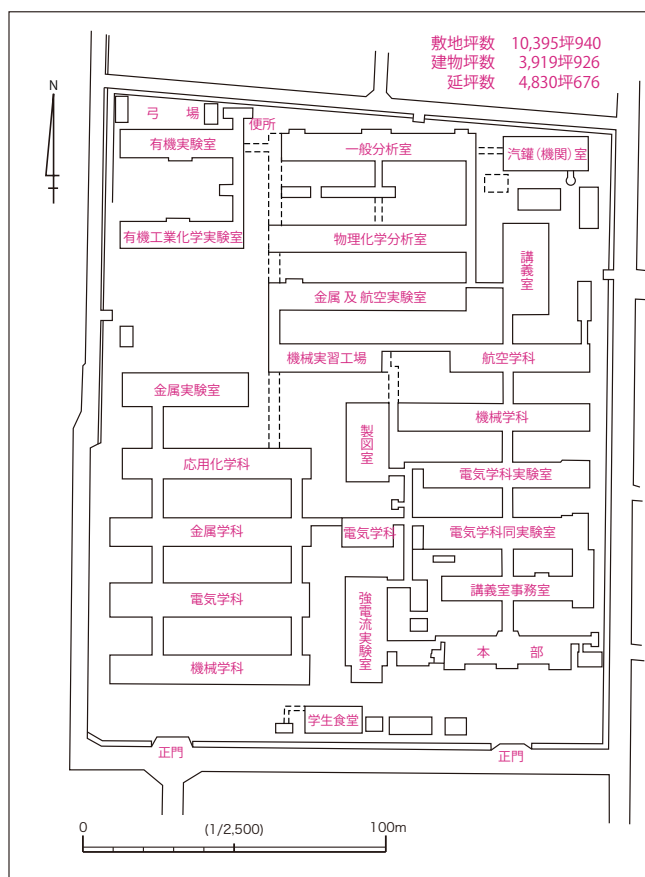
明治 43 (1910) 年【愛知県立第一中学校】



大正 11 (1922) 年【愛知県立第一中学校】

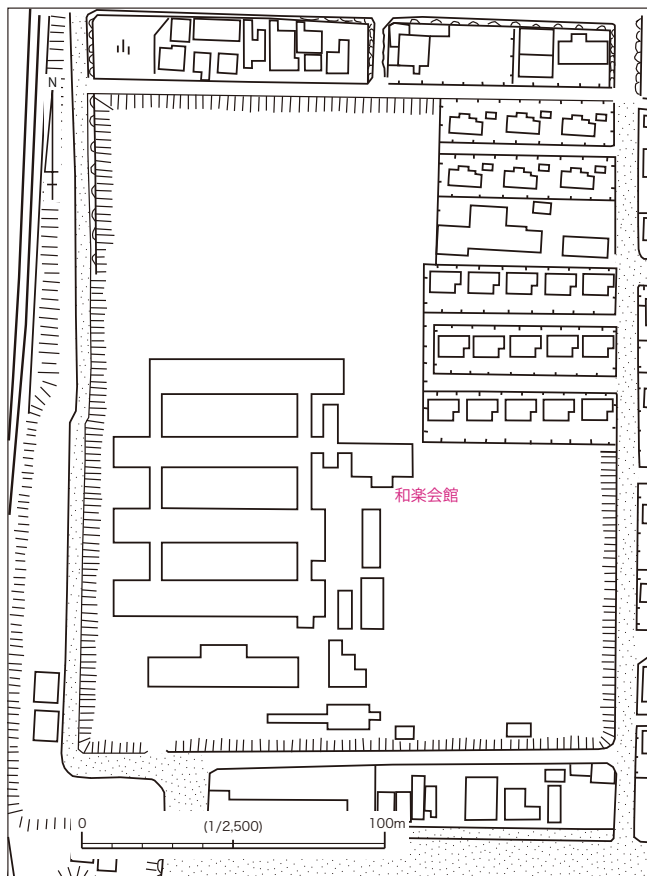


昭和 15 (1940) 年【名古屋帝国大学】

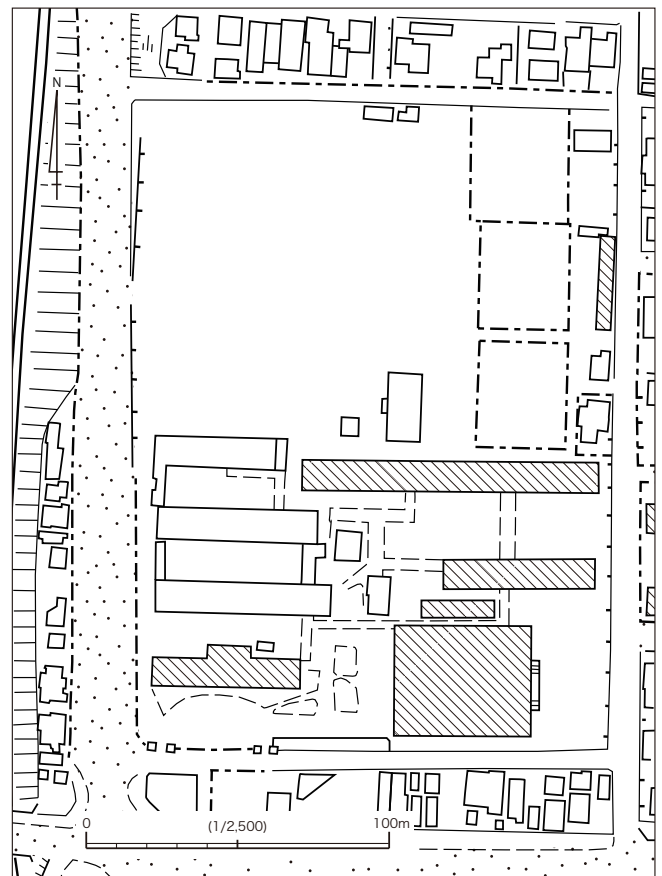


昭和 17 (1942) 年【名古屋帝国大学】

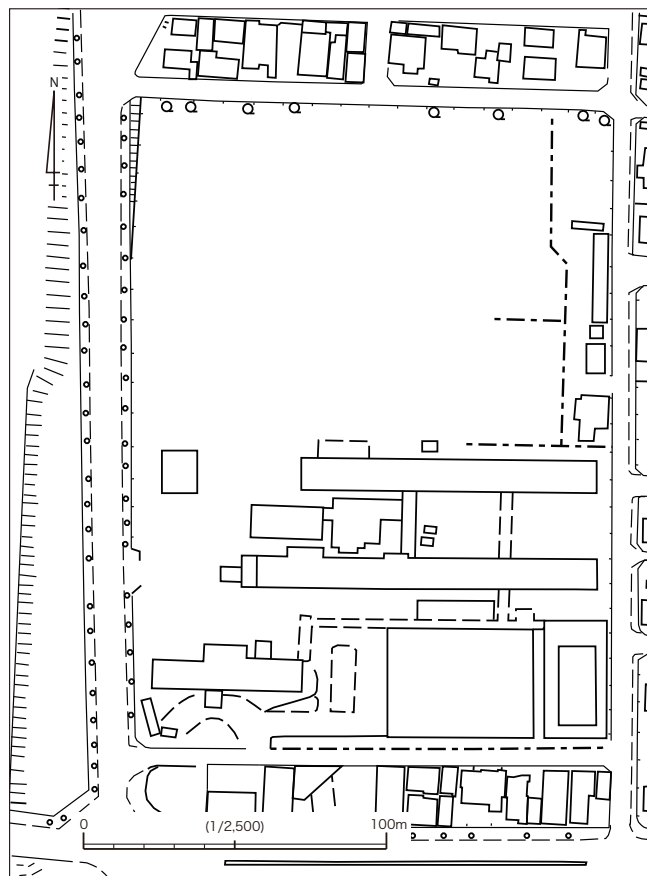
図3 学校関係の建物配置図(戦前)



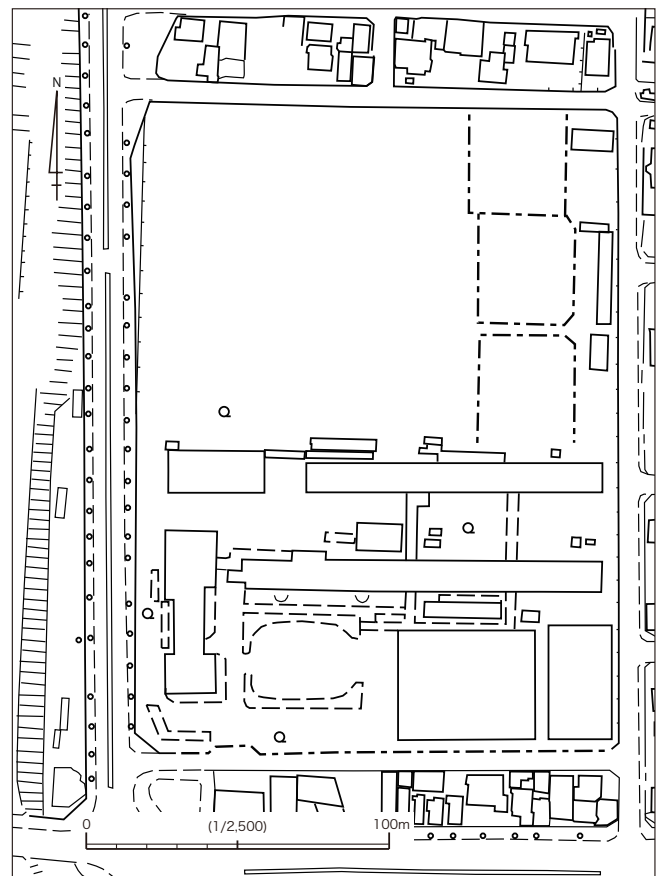
昭和 33 (1958) 年【愛知県立明和高等学校】



昭和 42 (1967) 年【愛知県立明和高等学校】



昭和 52 (1977) 年【愛知県立明和高等学校】



昭和 60 (1985) 年【愛知県立明和高等学校】

図 4 学校関係の建物配置図 (戦後)

造校舎が2棟、最終的には3棟建てられた。木造校舎の建設に合わせて講堂に当たる建物も建てられた。当時のGHQの許可のもと現在の豊田市猿投地区から教会の建物が移築され、和楽会館と名付けられた（森川・山本1988）。この和楽会館は、ほどなくできた明和高等学校になってからも使用され続けたとされており、昭和24（1949）年に生徒らによる考古学展覧会が実施された際には、当時、名古屋城跡二の丸地内に開校した名古屋大学文学部に着任される澄田正一を招いた講演会が実施されたという。第一高等女学校校舎は、学校敷地西側の道路拡張工事により、校舎西端のみが解体されることとなった。昭和38（1963）年に愛知県立千種高等学校が誕生した際は、校舎完成まで明和高等学校内に間借りすることとなったが、その際にこの木造校舎が割り当てられたという。千種高等学校が現在の一社に移ったあと、木造校舎は取り壊されたという。

なお、愛知県第一高等女学校校舎建設の頃、北東区画には住宅地が新たに設けられた。明和高等学校創設時もこの北東区画の住宅用地は存続していた。このような住宅建設は、終戦直後民生安定の根本要素の一つである住宅対策として行われたようである。当時政府は罹災都市における住宅対策を今日の公営住宅の前身とも言うべき罹災都市応急簡易住宅要綱を決定し、国庫補助による簡易住宅建設が行われたようである。終戦直後における公営住宅用地は市有地はもとより、国有地、民有地、公園緑地、学校敷地等の借地が主であったとも言われている（名古屋市計画局1961）。なお、役目を終えた仮設住宅は順次取り壊され、学校用地に戻っていった。昭和41（1966）年頃には、当地全体が学校用地に戻り、クラブハウスやテニスコートなどに整備されたようであった。

さて、愛知県第一高等女学校は、県立第一女子高等学校と改名後、すぐに明倫高等学校との併合で昭和23（1948）年10月に愛知県立明和高等学校が誕生した。藩校明倫館からの伝統を受け継ぎ、戦前の明倫中学校の流れを汲む伝統校である。普通科のみならず、音楽科や夜間の課程が増設されるなど、学校機能として充実も図られたところであった。明和高等学校となっ

てもこの建物をそのままに、周囲に校舎を建て増しする形で、整備が行われることとなったのは、先に触れた通りである。昭和28（1953）年に、これまでの木造校舎の南側に鉄筋コンクリートの本館が建設されて以来、新校舎建設と旧校舎の取り壊しが続くなか、明和館【体育館】（1963）、明光館【武道場など】（1968）、西館音楽棟（1984）が完成した。前庭部の整理により、昭和60（1985）年頃には、今回の建替工事前の形状になったことが分かる。そして、令和7（2025）年4月からの附属中学校開校とともに、校舎建替工事が令和6（2024）年から開始され、また新たな段階へと発展している様子を見ることができる。

4. 発掘調査成果から

愛知県埋蔵文化財センターでは、校舎建替え工事に伴い、西二葉町遺跡での発掘本調査を実施している。ここでは、令和6（2024）年度の埋蔵文化財発掘調査で得られた成果を紹介したい。調査は、大きく24A区、24B区、24C区、24D区の4区に分けられるが、その調査区位置について、図3・4で見たこれまでの学校校舎配置図と重ねた図面を提示する（図5）。図5の丸数字で示した地点は、明治期以降の学校校舎に関わる遺構が確認された地点であり、その確認状況を示す写真を図6に掲載しておく。発掘調査の成果は、大きく3点にまとめることができる。

成果の1点目は、遺構として、各学校校舎の建物跡が見つかったことである。24C区と24D区では、愛知一中時代の学校校舎基礎跡を確認することができた。深さ50cmの掘り方の中に扁平な河原石（グリ石）を敷き詰めた上にコンクリートを入れ、さらにレンガ積みを行った基礎である。特に良好な状態で見つかった24D区では校舎北側の基礎が検出された（図6の①）。レンガ積みは調査時では下から3段分が確認され、その北側にはコンクリートを流し込んで造られた側溝も見つかった。側溝のある北側が建物外側、南側が建物内側に当たると考えられる。この基礎に使用されたレンガには年代を示す刻印などは見当たらないものの、詳細は不明

ながら漢数字の刻まれたのが散見された。当時の校舎の写真をみると（図2）、コンクリート部分が地表に当たり、レンガ積み部分はさらに上の地表で目視できる位置にあたることが分かる。当時の建物は、このレンガ基礎の上に木造の建屋が築かれたものと考えられる。

24Ae区では、第一高等女学校校舎基礎跡を確認することができた。これは現在の敷地の西側に伸びる形で検出されたもので、名古屋市の道路拡張に伴う校舎一部取り壊しの事実符合する（図6の③）。扁平な河原石（グリ石）を敷き詰めた上にコンクリートを入れた基礎ではあるが、レンガ積みの構造にはなっておらず、断面が凸形状を呈するものである。基礎の法量もそれほど大きくなく、深さ40cm程度と思われる。

24B区では、名古屋帝国大学時代の学生食堂舎の基礎が確認された（図6の②）。この学生食堂の基礎は、所々に後世の配管敷設で欠失しているところがあるものの、長さ20m・幅10mにわたりほぼ全体を確認することができた。この建物基礎自体には焼土層の堆積は認められず、かつ周囲には戦後の廃棄土坑が見つかったことから勘案して、この建物自体は空襲を免れた可能性が高い。これとは別に、24B区では、明和高等学校創設時の最も古いコンクリート建物となった旧本館の基礎跡を確認することができた（図6の④）。大きな攪乱状の凹みとして検出されたものであるが、この掘り方底面には敷き詰められた扁平な河原石（グリ石）の上に、コンクリートの土間が薄く張られた様子を見ることができた。この基礎の掘り方は、熱田層の表面レベルから1m以上は深く掘削されており、これまでの基礎と比べて大がかりなものとなった様子を見ることができた。

成果の2点目は、これら学校校舎基礎が層位的な関係をもって確認することができた点である。特に、愛知一中時代の学校校舎基礎跡が空襲による焼土層下から良好な状態で確認された24D区ではこの建物基礎を覆う形で、太平洋戦争の空襲で焼けた際の焼土塊が見つかった。焼土塊のなかには高温で変色・変形したガラス片・瓦片が多く含まれており、空襲の激しさを物語るものとなっていた。

成果の3点目は、学校活動に関連する遺物が出土した点である。学生ボタン、製図インク容器や、陶器片などがある。陶器片の中には、学校名の印字されたものがごくわずかにあるが、それには湯呑碗が多い（図5右下）。これらの容器がどのような場面で使用されたものかは不明であるが、出土点数が稀少であることから、実は学校外での使用が主であったと仮定すると、何かの記念品のような品物であった可能性も考えられる。

図5右下の湯呑碗は、いずれも磁器製である。1は、胴部が張る一方、口縁部が外反する器形を呈するもので、「愛知一中」の銘が認められる。コバルト色の毛筆体による染付が施されている。2は杯状の器形を呈するもので、「学」の異字体が表示されている。どの学校運営時に由来するものかは不明であるが、コバルト色の毛筆体による染付が施されているものであることから、愛知一中時代のものである可能性が高い。3は口縁部が若干外反する器形で、ウグイス色を呈する顔料により、口縁部に並行する二重線と「和楽会」の銘が記されている。和楽会は愛知県第一高等女学校の同窓会名であり、一説には明和高等学校設立時の「和」の字の由来になったとも言われている。この陶器は統制陶器と言われる一群のもので、底面に記された記号のようなものが登録された窯元を示していたものと考えられる。戦中および戦後すぐの陶器生産の様子を窺うことができるものである。4も口縁部が若干外反する器形で、コバルト色の銅板転写による絵付けで、明和高等学校の校章と、その反対面には丸のなかに百合文様が描かれている。この百合文様が何を表しているかは不明であるが、明和高等学校の校章と同等の意味・内容を有するものであった可能性が考えられる。なお、底面には瀬戸市所在の製造窯元名が記されている。

5. まとめ

以上、西二葉町遺跡について、明治期以降の土地利用について、図面などの記録類と、発掘調査成果から整理をしてみた。

これまでもよく言われているように、当地は

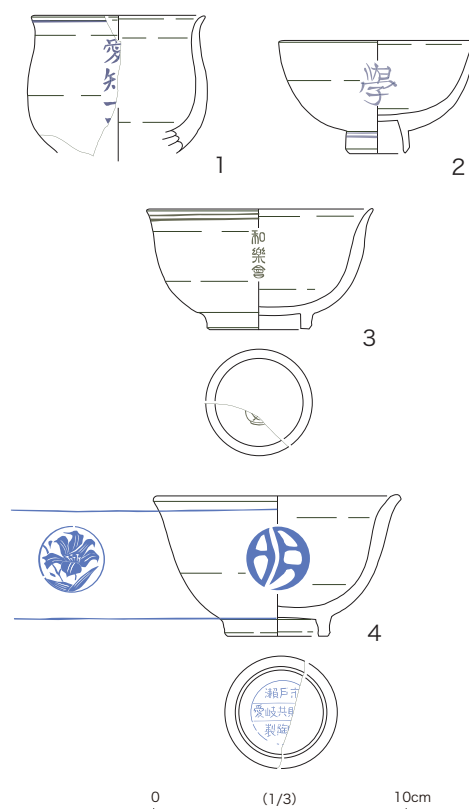
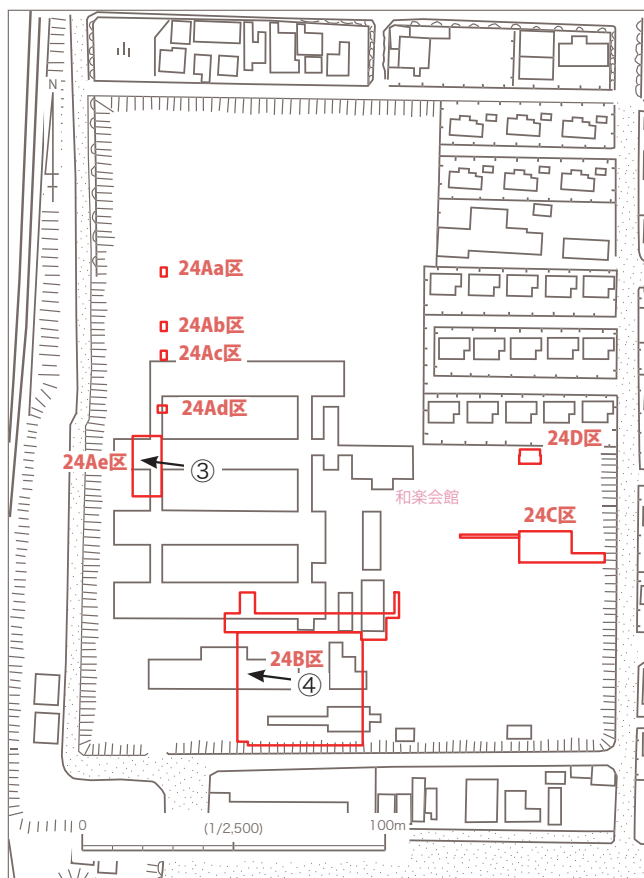
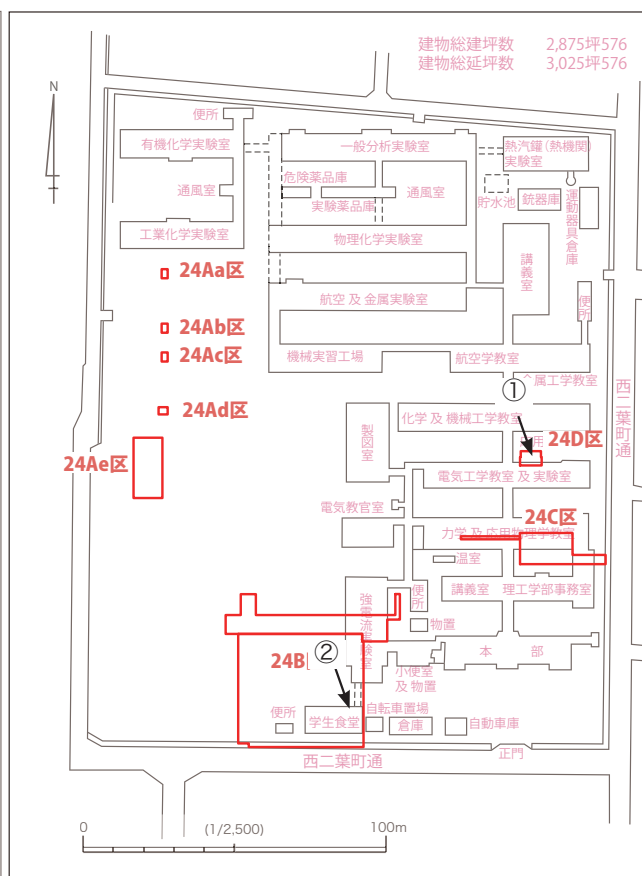
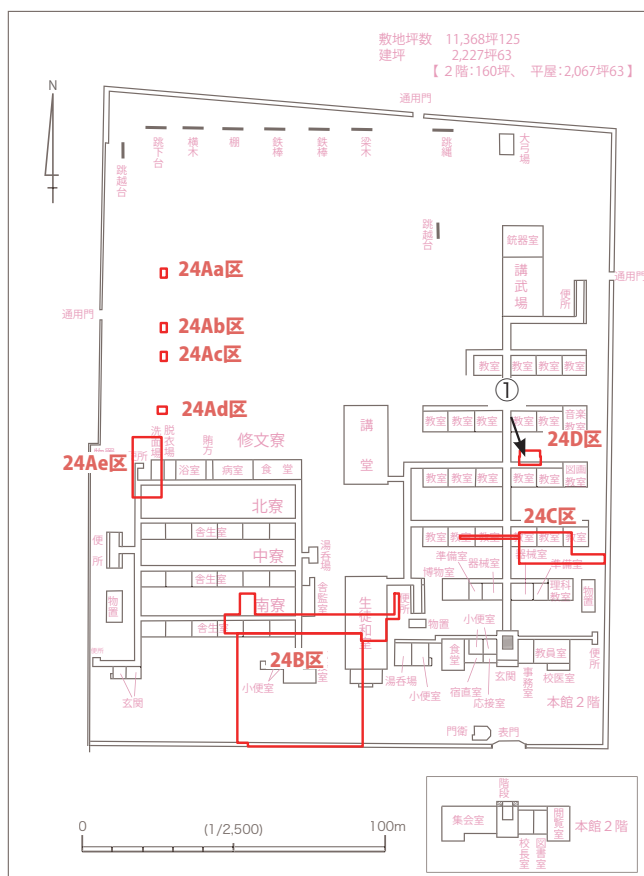


図5 学校校舎と令和6年度発掘調査位置図
および出土遺物（右下図）



①愛知県第一中学校校舎基礎【24D区】(北西より)



「愛知一中」銘 湯呑碗
【試掘・24C区付近】



学生制服ボタン【24B区】



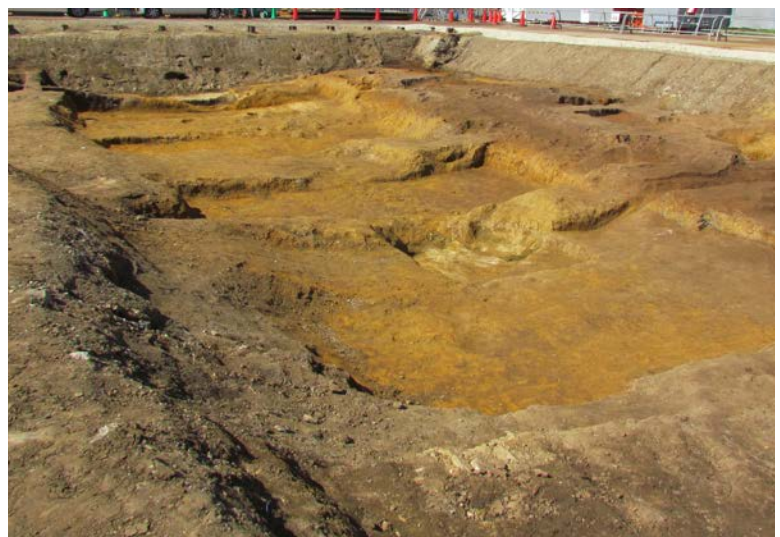
②名古屋帝国大学学生食堂基礎【24B区】(北西より)



「和楽会」銘 湯呑碗【24B区】



③県立第一高等女学校校舎基礎【24Ae区】(東より)



④県立明和高等学校旧本館基礎【24B区】(東より)

図6 発掘調査で確認された学校関係の遺構・遺物(囲み数字は図4と一致)

愛知県の中等・高等教育史を考える上で、とても重要な場所であることが、あらためて理解できた。本稿をまとめることで、当時の社会で期待されていた教育機関としての重要性を、校舎などの建物構造や配置の変遷から辿ることができそうだという、予見を得ることができた。今後、さらに発掘調査が行われるにつれて、教育・研究機関としてどのように体制が整えられていったのかということが、より詳細に窺い知ることができるようになると期待されるのである。

謝辞

本稿を草するに際して、以下の機関および方々からご教示・ご配慮を賜った。記して謝意を表する次第である。

愛知県立明和高等学校、愛知県立明和高等学校明和会、愛知県立旭丘高等学校鯉光会、東海国立大学機構大学文書資料室、名古屋大学人文学研究科考古学研究室、名古屋大学博物館、公益財団法人 犬山城白帝文庫、愛知県教育委員会財務施設課、愛知県民文化局文化芸術課文化財室、愛知県埋蔵文化財調査センター、戸田建設株式会社名古屋支店、公益財団法人 名古屋まちづくり公社名古屋都市センター、

足立 敏、荒井信貴、市川和子、梶原義実、加藤由美子、加藤一郎、門脇誠二、鬼頭智美、木村有作、熊崎斗吾、城ヶ谷和広、中島美枝子、野村滋之、堀田慎一郎、渡邊善一

【引用・参考文献】

- 愛知県農業総合試験場 1981 『農総試 15 年のあゆみ』
- 愛知県立第一中学校校友会 1910 『学林』69. 校舎落成記念
- 愛知県立第一中学校校友会 1929 『学林』創立五十周年記念号 校舎落成記念
- 伊藤正人 1999 『東二葉遺跡第 2 次発掘調査報告書』名古屋市教育局
- 勝山吉章 1991 「名古屋帝国大学設立事情」『名古屋大学史紀要』2. 89～119 頁 名古屋大学史編纂室
- 川添和暁 2025 「西二葉町遺跡」『年報 令和 6 年度』15～23 頁 愛知県埋蔵文化財センター
- 木方十根 2004 「創設期名古屋帝国大学の学園計画」『日本建築学会計画系論文集』577. 181～188 頁 日本建築学会
- 鬼頭有一ほか 1998 『愛知県立明和高等学校校史』「明和会」明和高等学校設立五十周年記念事業実行委員会
- 名古屋市計画局 1962 『名古屋戦災復興誌』
- 名古屋市土木局 1986 『愛知県名古屋市区市街地籍全図復刻版』名古屋市制百周年記念 名古屋市
- 名古屋帝国大学 1940 『名古屋帝国大学一覧 自昭和十四年 至昭和十五年』
- 名古屋帝国大学 1943 『名古屋帝国大学一覧 昭和十七年』
- 名古屋大学文学部 1978 『名古屋大学文学部二〇年の歩み』
- 東区史編纂委員会 1973 『東区史』
- 真野 毅ほか 1977 『鯉光百年史』愛知一中（旭丘高校）創立百年祭実行委員会
- 森川きく・山本花子ほか 1988 『愛知県第一高等女学校校史』愛知県第一高等女学校史刊行会